

議事概要

名称：第 12 回アジア太平洋生物多様性観測ネットワーク (AP-BON) 会議 (オンライン)

期間：令和 3 年 1 月 22 日 (金)

会場：WebEx meeting room (オンライン)

開会あいさつ

開会あいさつ：村岡裕由 (共同議長、岐阜大学、日本)

3 名の APBON 共同議長の一人である村岡氏が主催者を代表してあいさつし、2008 年からの APBON の歴史に簡単に触れつつ参加者への謝意を述べた。また、基調講演等で新たな行動計画を紹介した。また、過去 10 年間 APBON の共同議長を務めてきた矢原氏、Sheila 氏、Kim 氏の功績を称えつつ、11 月中旬から新たな共同議長として Pungga 氏 (マレーシア)、Trisurat 氏 (タイ) 及び村岡氏 (日本) が就任したことを紹介するとともに、日本国環境省の変わらぬ支援に謝辞を述べた。

開会あいさつ：Runi Anak Sylvester Pungga (共同議長、サラワク森林局、マレーシア)

APBON の新共同議長に就任した Pungga 氏は本日の参加に謝意を述べつつ、第 12 回 APBON ワークショップの内容の重要性を紹介し、盛んな情報共有に期待すると述べた。

開会あいさつ：Yongyut Trisurat 氏 (共同議長、カセサート大学、タイ)

APBON の新共同議長に就任した Yongyut 氏は前任の議長に感謝を述べつつ、本日の参加者に謝意を述べた。そして APBON のこれまでの業績を称えつつ、新共同議長として共に次のステップへ向かっていくための戦略を議論したいと述べた。

開会あいさつ：松本英明 (日本国環境省)

APBON の事務局を代表して環境省生物多様性センター長である松本氏よりあいさつがあり、コロナ禍により初の試みとなるオンライン開催に多くの参加者が参集したことに謝意を述べつつ、新たに就任した 3 名の共同議長への期待を述べた。アジア太平洋地域における生態系ネットワークとして生物多様性に関する情報の収集と共有を目的として 2009 年に設立された APBON は今回で 12 回目のワークショップを迎え、当該地域の生物多様性観測における最新の情報収集に寄与しており、かつ GEO BON、CBD、KBA 等の国際組織との連携など、有意義な議論が行われることに期待を寄せた。

2030 年までの APBON 戦略計画及び本ワークショップの目的について

(村岡裕由 岐阜大学 日本)

セッション I

BON の発展と社会貢献

発表1 ポスト 2020 年グローバル生物多様性枠組みの CBD について

Mr. Basile van Havre, Canadian Wildlife Service

質疑応答：

質問：2020年目標後の目標設定とモニタリング枠組みについて CBD では議論が行われているのか。

回答：遺伝的多様性の分野ではより一層の努力が必要であるが、会合が行われた際には報告は受けており、CBD ウェブサイトに掲載されたモニタリング枠組みを見れば内容が分かる。分かりにくい部分もあるかと思うが、その際にはコメントをいただきたい。

質問：様々な会議の統合という課題が出てきており、例えば、気候変動に関する条約では今週初めにどこかで一つの計画が発表されたが、パキスタンで10億本の木を植えるという大規模な活動を行っているにもかかわらず、津波の被害を受けて、それらの木の半分が失われたことに多くの自然保護科学者が警鐘を鳴らしている。また、“World Life Tree Framework”の中でも、CITES 掲載種の多くの種を失っている。したがって、これらの異なる条約をよりよく統合して相乗効果を発揮し、実際にお互いを補完し、2020年以降の枠組みの目標を達成するためにどうしたらよいだろうか。

回答：“Planet Summit”に関連したワークショップが12時間後に開催されるが、その仕組みを構築する必要がある。最初のステップとしては、気候変動プロジェクトが生物多様性に悪影響を与えないようにすることで、ユーカリの問題はそれで解決した。しかし、それだけでは不十分で、望ましいのは自然にポジティブ（nature-positive）なプロジェクトである。カナダの例では200万本の植樹目標を掲げているが、その200万本の木を必要な場所に植えられるようにしたいと考えている。北極圏の森林では過去に地震探査も行われている。そこでは、在来種の木を植え直すことで効果を確認し、気候と保護区の効果を確認したいと考えている。1つの事業で3倍の効果を確認できる、これが第1のポイントである。

第2のポイントは、機関の間の調整である。ワシントン条約との連携は気候に関するものよりも簡単であり、これは同じ条約のグループに属するためである。我々が行っているのは、パフォーマンス指標を確認することで、例えば、持続可能な取り組みに関与する者は、ワシントン条約のものと直接リンクするべきである。つまり、ワシントン条約は非常に効果的な機械であり、1つの決定、1つの種というように、種のレベルで見れば、非常に

効果的な実施場所ということが出来るため、種の間をつなぐりを構築することに取り組むことができる。不十分かもしれないが、これが回答の一つである。

質問：その他の効果的な保全措置（OECM）について質問したい。その理由としては、次の CBD 目標では保護地域の拡大を目指し、多くの人々がその他の効果的な地域保全に注目している。しかし、CBD における海洋分野ではそのような議論はあまり聞かない。

回答：全体的な景観において個別の保全目標を議論するのは難しい。陸域から最後には海洋に話を進めていければと思うが、例えば全体的な景観管理の際には製造地域と生活地域に分け、それ以外の地域を保護対象とするが、そこでは生物多様性の保護は主要目的ではないとしてもその成果というのはやがて出てくるものである。海洋に話を移せば、イギリスの周りの海域には多くの保護海域があり、いくつかのレベルで活動を制限しているが、それは捕獲禁止地域ではなく地元の漁師などはそこで操業している。大切な森林地域を保護区として進入禁止にすることも大事だが、経済活動エリアも同様に大切であるため、長期的な観点で見ればそれが良い結果をもたらすと考えている。

発表2 .GEO BON の次なる計画

Prof. Andrew Gonzalez, Co-chair of GEO BON

質疑応答

質問：グローバルなコミュニティを包括する GEOBON の将来計画は非常に興味深いものであり、その点で質問がある。それはいかにして APBON に多様な人材や組織を取り込んでいくか、いかにして APBON のメンバーが GEOBON のグローバルな生物多様性観測ネットワークに貢献していくか、そしていかにして我々が様々な作業部会を GEOBON コミュニティに積極的に参加させていくかという点である。

回答：12年間の学習の歴史を持つ APBON の貢献としてはいくつかのレベルがあり、最高のレベルは諸国間の協力体制をいかにして構築するかということで、国を越えた協力文化を持つ APBON の作業部会には、グローバルな統合システムを構築するための協力、特に APBON からの強力な支援をお願いしたい。資金調達については常に限界があるが、一番効果的な資金の使い方はネットワークの維持である。また、データソースの統合の機会に関しても、APBON は異なった生物群の分類学情報を収集していると理解しており、変化の画像を提供するための情報の統合やそれを解析するツールの種類、また、ライブツィヒにアイデアを得た EBV Data Portal への適合等についても学んでいきたい。データセットの構築フローについては容易であるので、ぜひ我々のデータ部会にもご参加いただきたい。第3のポイントはナレッジハブであり、それには様々なステークホルダーや利用者、科学

者に統一した作業アプローチを提供するものであり、このようなナレッジハブをすでに構築しているのかどうか、そして、GEOBON ネットワークの中に、APBON のためのナレッジハブを構築していただきたい。以上ご紹介した 3 つのレベルで、皆様の経験から相互に学ぶ機会もあり、我々が貢献できることもあると考えている。

質問：GEOBON 議長への就任をお祝いする。GEOBON の当初の発展を考えると、共同議長の仕事としては EBV が重要な進歩の一つだったと思うが、GEOBON 議長としての成果の指標となるような例はあるか。

回答：私にとっての成功の簡単な指標は BON ネットワークの拡大である。現時点では世界における BON の数は比較的少なく、ほとんどの国には BON が存在すらしていない。そこで、就任から 3 年間で BON の数を 2 倍にし、6 年目にはさらに 2 倍にしたいと考えている。このようにして勢いを維持しながら BON を増やしていくとしても、それだけでは世界的な調整はできない。そこで重要な指標となるのは BON 同士の連携の度合いであり、それを促進する方法はいくつかあると考えている。その中には、技術的なインフォマティクスのインフラもあるが、例えば世界規模の EBV 製品を作ろうとする際の協力や連携を明確にすることが必要である。また、気候変動や生息地の減少などの影響を評価する場合、現時点では BON 同士では異なる種の情報を共有していないため、BON として評価には貢献できず、これを今後数年間で加速させたいと考えている。

Presentation: 3. ヒンドゥークシュ・ヒマラヤ地域における愛知目標に関する進捗

Dr. Sunita Chaudhary, ICIMOD

質疑応答

質問：水循環や食料生産、そのほか気候変動に関することなど、ICIMOD や APBON、他の AOGEO コミュニティなどと共に取り組むことなどがあると思うが、生物多様性のコミュニティ、特にヒマラヤの宗教にとって、他の分野と協力するために非常に重要なポイントは何か。

回答：我々は小さな研究所であるが、世界や地域の研究所と協力している。例えば、現在、CBT 事務局と共同してこの地域での進捗状況を評価している。また、ICIMOD とネットワークの他のメンバーは、森林再生と森林管理の経験を共有し、相互利益を図っている。コミュニティ林の保全・管理のための森林インベントリや CFUG の作業計画の作成を支援する手法として、森林データ管理のための GIS と GPS の利用に関するトレーニングを林業関係者に提供した。その中でも淡水は主要分野の一つで、現在、ネパール政府の求めに応じて淡水のハンドブックを作成している。しかし、この分野は非常に限られた研究しか行われていないため、共同研究を行う余地が大きい。以前、IGES から高地湿地に関する小規模なブ

プロジェクトを受けたことがあるが、資金も限られており、また、高地のアクセスが難しいため、非常に限られた研究しか行われなかった。そのため、APBON との事業において、特に淡水の生態系における生物多様性のデータを収集することは大きなチャンスだと考えている。

Presentation: 4. 太平洋地域の現状と課題

Dr. Yimnang Golbuu, CEO, Palau International Coral Reef Center

質疑応答

質問：先ほどお示しいただいたように、海洋保護区は捕食魚には非常に効果的だが、その他の餌を捕食するタイプの魚については海洋保護区と海洋保護区の外ではあまり大きな違いはないように思う。魚を機能的グループで分ける際の違いは何か。

回答：全ての魚類を見ればその差は歴然で、海洋保護区と非保護区では魚の数が2倍になっている。しかし、海洋での頂点である捕食魚にこれほど大きな差があるのは、それが貴重な魚だからで、漁師が狙うのはこのような魚であり、他の魚はあまり狙われない。非常に狙われやすい、あるいは貴重な種である岸辺の魚については、海洋保護区内外で5倍の差がみられる。全ての魚を見ると海洋保護区内外では2倍となっており、前述したように、これは上位捕食魚を狙う必要があるためである。

質問：発表冒頭の写真で、浸食や堆積などの陸域からの混入の影響について述べていた。それを管理することで、気候変動や白化の影響を変えられることができると思うか。また、海洋保護区だけでなく、海洋保護区を含めた海域の保護区でもそのような管理が行われているのか。

回答：我々が進めている保護区に関する研究では、海洋保護区、特に陸地に近い保護区で監視を行い、密猟者や他種がいないことを確認している。陸地からの影響が余りにも大きいため、この生息地では境界線を見ることさえできないことが分かると思う。このように、海洋保護区に加えて土地の管理や保護についても考える必要があるということである。パラオのような海岸近くの小さな島では、陸上で何をしても最終的には海洋環境に影響を与えるため、注意を怠って多くの建設を行うと、それらの活動が全てを台無しにして海洋環境に影響を及ぼしてしまう。また、気候変動の影響によって嵐や雨が一層激しくなることで、状況はさらに悪化してしまう。

記念撮影 (第 1 回)



セッション II

地域における BON の進捗報告

発表：ASEAN 生物多様性センター (Christian Elloran)

発表：中国 (Sino BON) (Xiaojuan Feng)

発表：インドネシア (Dedy Darnaedi)

発表：日本 (JBON) (Yayoi Takeuchi)

発表：韓国 (KBON) (Chan-Ho Park)

発表：マレーシア (Zarina Sebli)

発表：ネパール (Mangal Man Shakya)

発表：タイ (Yongyut Trisurat)

セッション III

グループ別セッション(陸域、淡水、海域グループ)

グループ別セッションでは下記の項目に留意して議論が行われた。

1. 観測計画及びデータ統合
(マスターサイト、現在進行中のプロジェクト、SDGs の指標等)
2. データベース及び情報プラットフォーム
(科学者コミュニティ、利用者コミュニティ向け)
3. 能力構築
4. COVID-19 パンデミック禍及びその後
5. AOGEO への貢献
(IPS、クロスカッティングテーマ、生物多様性関連イシューからのナレッジシェアリング)
6. GEO BON との協力

※このセッションでは、上記の点について 3 つのワーキンググループで議論し、その結果を各ワーキンググループのリーダーがセッション 4 で報告発表を行った。

セッションIV

2021年に向けたエンゲージメント、ネットワーク、アクション

1. Presentation : 生物多様性主要地域

Dr. Andrew Plumptre, Head, Key Biodiversity Area Secretariat

質疑応答

質問：この基準は算出可能か。

回答：いくつかの基準が満たされていれば、その場所は生物多様性の重要なエリアとなり、より強力で安全な場所となる傾向がある。なぜなら、複数のトリガー種がある場合、何らかの理由で1つのトリガー種の個体数が相当数失われたとしても、数を回復させるまで他の種によってその場所を維持することができるからである。

質問：生物多様性の保全の観点から、KBAはAPBONのサイトが機能するための良い基準になると思うので、この活動はAPBONのメンバーやYongyut氏と共に一層推進していただきたい。

回答：同感である。メンバーが自身の地域の重要な生物多様性の情報を集めていることは、地域の重要な生物多様性の保全に貢献するための一つの方法である。このような国別調整部会(national coordination group)を構成する場合、生物多様性に関する多くの知識と経験を有する大学や博物館に関係する科学者に部会の中心を担っていただくことを強く推奨する。また、保護団体や、理想的には政府との提携も奨励しており、国によっては、政府が関心を持ち、最初から参加する国もあれば、後から参加する国もある。その国の関心事や力関係にもよるが、自国で部会を構成できないかを検討していただきたい。

2. グループ別セッションの結果に関する報告:

陸域グループ : Yayoi Takeuchi (National institute for Environmental Studies, Japan)

淡水グループ: Yuichi Kano (Kyushu University, Japan)

海域グループ: Masahiro Nakaoka (Hokkaido University, Japan)

ディスカッション:

質問: 様々な議論が行われたが、前回のワークショップでは、スーパーサイトとの連携をいかにするかという計画について議論した。新しく共同議長を迎えるにあたり、私はTGプランをどのように実行し、作業部会内で更に活動を加速するかを考えている。そして、MBONとAPMBONは活発に活動しているが、他のグループそれほど活発に活動してはならず、そのような中で新議長はどのように進めていくか考えを聞かせていただきたい。また前回、今年にはCBDの他にIUCNの会議もあるという話をしたが、こういった会議においていかに積極的かつ有益に貢献していくのか。

回答: ご意見に感謝する。ご指摘の点は、戦略プランに基づきCBDやIUCNへの貢献をいかに検討するかというまさに我々が議論したい点と合致するものである。

3. AOGEO – 統合重点研究、GEO エンゲージメント優先事項への貢献、他のタスクグループとの連携

討議セッション

コメント: 自然と人間を一体に考えることの重要性を強調すべきであり、社会生態系の視点や自然と人間の融合に関しては今後も強調していかなければならない。しかし、自然と人間の関係や相互作用を強調することについてGEOコミュニティはやや遅れている感がある。今回のCOVID-19パンデミックの影響は、自然と人間の融合の重要性を強調する良い機会であり、APBONはこの考えをよく理解していると思うので、APBONの重要な役割としてGEOコミュニティにおいて自然と人間の両方を観察することを強調した方が良いと考える。

コメント: これは重要なポイントである。

コメント: COVID-19の影響について、実は研究活動への影響については触れていない。我々の多くは生産性という点で多くの悪影響を受け、モニタリングや観測を中止せざるを得なくなったため、明確な結果を得ることができなかった。他の多くのグループも同じ状況を抱えていると思うので、この問題解決のために取り組んでいきたい。

コメント: 多くの海外の同僚から、フィールドワークや会議の多くがほとんど制限されているという話を聞く。特に我々生物多様性の科学者や教育者は活動がかなり制限されているが、それと同時に、この制限をいかにして克服するかアイデアを議論することはできないだろうか。例えば、海域グループの仲岡氏がオンライントレーニングについて言及さ

れたが、これは非常に有効だと思う。また、観測に関しては、このような制限の中で、生物多様性や生態系の観測をどのように継続・拡大していくかについて、いくつかのアイデアを提起することも可能ではないか。

コメント：これは非常に重要なポイントで、今までは最先端の技術を使っても、やはりその場になければならなかった。しかし、将来的には遠隔操作のカメラを設置して自然を観察することもできるのではないか。誰のアイデアでも伺ってみたい。

コメント：フィールドワークが制限されることはかなりマイナスであるが、オンラインコースに限らず、市井の科学を推進することは可能ではないか。例えば、市民に生物の写真を撮ってもらい、それをディープラーニングの手法などと組み合わせることで、もちろん現地に行って指導する必要がある場合もあるかもしれないが、市民による生物多様性のモニタリング活動を促進することができるかもしれない。COVID-19 のような状況でも、うまくいけば二酸化炭素排出量削減にもつながるため、このような活動を提案することにはメリットがあると考えている。

コメント：学生を強制的に参加させる仕組みの開発が重要である。我々の多くは地域に学生を抱えており、そして彼らはこの地域の将来の研究者であり、将来の保全活動の担い手でもある。長期的なデータの収集のみならず標準化のための共同作業などを教える必要があるため、異なった地域で比較可能な研究を共同で実施している若い研究者を巻き込んでいく方法はないだろうか。なぜなら、そのようにして継承されていくものは非常に強力であり、現在のような移動が困難な時代に共同で作業することで、より普遍的な基準を開発し、異なる地域からの研究やデータを収集する際に、そのデータが完全に比較可能であることが理解できる。そして地域全体のパターンを理解する上でも、収集メカニズムの違いによって混乱することがないということが理解できるからである。

コメント：COVID-19 の影響について多くのことを話してきたが、すでに1年近くが経過し、多くの政府、市民社会、民間部門が行動を起こし、すでに現場での対応が進んでいるように感じている。そのため、これらの対応が生物多様性や生態系に与える影響についても確認する必要がある。

コメント：第一に我々は現在、オフラインの会議の代替で定期的なワークショップを開催するという非常に大きな試みを経験している。これは COVID-19 の影響を受けた我々が考えなければならない大きなことで、その機会を与えてくれた共同議長と日本国環境省に対して御礼を申し上げる。そして第二に、現在 APBON の取り組みとしてデータ情報と知識の共有について考えているが、データのネットワークを構築するための重要なポイントとして

は、どのように行動すべきか、どのように生きていくかという知恵を考えるべき時が来ていると考えている。人獣共通感染症に至るパンデミックであるという点で、今は「どのように振る舞うべきか」「どのように行動すべきか」が重要になってきていると思う。この COVID-19 パンデミック後のニューノーマルという意味で、このことを考えてみてはいかがだろうか。

コメント：ニューノーマルやポストパンデミックなどと言われているが、ポストだけではなく、パンデミックを克服してからについても考えなければならない。私にとっては after と beyond の違いを理解するのは少し難しいが、先ほどのコメントはこの問題に関連していると思う。

コメント：このようなパンデミックを克服するために、これまでとは違った行動をとる必要があるかどうかということである。

村岡氏：

今掲示している資料を参加者全員にお送りしたので、各位これらのアイデアについてキーワードやフレーズを自由に入力していただきたい。また、フィードバックを記入していただければ、それらを集約して各位に共有する。これは AOGE0 委員会への意見としてだけでなく、APBON の今後の活動のアイデアにもなる可能性もある。

4. 2021 年における APBON 活動計画

このセッションでは、以下の点が検討され、自由議論が行われた。

- ・ GEOBON、KBA、IPBES 及びその他機関への貢献について
- ・ 新たな出版計画について
- ・ 第 13 回 AOGE0 シンポジウムへの参加について（2021 年 3 月 3 日～5 日）
- ・ 次回の APBON ワークショップについて

討議セッション

コメント：陸域、淡水、海域それぞれの作業プランに加え、陸域と海域の相互作用や生態系の連関性に関するプロジェクトも興味深いと思う。しかし現在のところメコン川流域では何かできるかもしれないが、海域システムにおいてはまだ何もしていない。しかし、このような生態系の連関性に関する研究は他の分野でも行うことができ、将来的には、異なる生態系の連続性に関する研究に取り組むメンバーがいるかもしれない。

コメント：それは良いポイントである。数年前、APBONでもランドスケープ・アプローチについても議論した。

コメント：それは、異なるタイプの生態系を研究している研究者による共同活動となるため、更に活動を促進すると思われる。

コメント：この点を踏まえ、アジア太平洋地域の様々な国が生態系ネットワークの Red List にコミットしており、これは APBON が積極的に貢献できることでもある。例えば、我々は陸域グループを森林グループと呼ぶことも多いが、この地域では森林が唯一の生態系であるが、森林は頻繁にギャップを招くシステムであることも分かっている。そのため、可能であれば、生態系の Red List 化を目指しつつ、より包括的な概要を把握することに注力したい。なぜなら、ここに地域横断的な生態系及び生物学的インベントリが世界に開かれていることを確認するためである。

コメント：Green-nesting という方法だろうか。

コメント：生態系のレッドリストには種のレッドリストが反映されており、生態系が失われた割合は、基本的には固有性の度合いや地域の大きさなどを考慮して、その生態系がどれだけ危機に瀕しているかを示すものである。中国では、生態系のレッドリスト化に向けた取り組みや仮説的なリストの作成が行われているが、ほとんどの生態系がレッドリスト化されておらず、例えば、非常に難易度の高い生態系のレッドリストの詳細も作成されていない。また、生態系のグリーンリストについては、全く異なるシステムを使用しているため、種のリストと同様にして読むことはできない。

コメント：我々は地域の全てをまとめてきておらず、情報や日付を収集して APBON のナレッジマネジメントを行い、グローバルなコミュニティにつなげていくべきだと思う。

コメント：似たようなアイデアとして、APBON ポータルのようなものを開発し、データベースのリストを作成するということがある。我々の地域には様々なデータベースが存在するが、近い将来、我々の地域の出版物リストや各国の BON、協力者のリスト、情報シート、そして APBON のマスターサイトのリストを作成できると思うし、このような APBON ポータルやデータ・ナレッジ・インフォメーション・ポータル・サイトによって、GEO BON のような多様なネットワークと連携するための実用的な手段となり得る。今朝の Andrew 氏の発表の後、私は彼と APBON と GEO BON をどのように連携させるかについて話をした。Sheila 氏提案のこの種のプラットフォームは、今年検討すべき重要な項目の一つであろう。

コメント：その意見に賛成であり、より具体的に説明する必要があると思う。また、APBON の 2021 年作業計画では愛知ターゲットへのコミットメントや特に OECM も形として見えて

きており、今後 10 年間の世界における生物多様性の枠組みの中でこれがハイライトの一つになると思っている。この地域には保護区以外の先住民やコミュニティの地域が非常に多く、2021 年からはキャパシティビルディングや知識の向上に取り組むことができる。今後のウェビナーでは、誰かに OECM について発表していただきたいと考えている。

コメント： それも非常に重要なポイントである。この点について検討するとともに、それと同時に、この非常に重要な国際的課題に取り組むためには、このような貢献活動が重要であることはすでに共有されている。その一方で、APBON がどの機関と協力してこの種の連携を主導できるのかも考えてみたい。各位それぞれネットワークや人脈を持っていると思うので、そのような会合を部門別コミュニティとして開催する一案として、様々なアイデアを現実のものにできるかもしれない。さらにその中で、2020 年以降の生物多様性の枠組みとの連携について考えることができれば素晴らしいことだと考えている。

コメント： 先ほどのコメントについて、地域における適切な保護地区に関する比較などを行うためのファンドを見つけるチャンスとなる可能性もあり、興味深い研究協力ができると思う。

コメント： 私の方では特にアイデアはないが、誰かこの件について意見はあるか。

コメント： グローバルな機関である WCPA、OECM の議長や副議長とは確実につながることができる。というのも、アジア太平洋地域において OECM に関するウェビナーを開催したいという意見が時々出てくるからである。また、彼らは WCPA のデータベース地域にデータを入力する方法に関する取り組みも進めている。CBD は多くの国に愛知目標 11 を達成させるために多くの努力を払っており、可能であれば次回のウェビナーでは OECM について議論したい。それに加えて資金調達やエンゲージメントについても検討したい。資金調達は大きな問題であるが、OECM がネットワークや手段を見つける一助となるかもしれない。いずれにしても、継続的なフォローが必要な問題である。

コメント： 12 月に北京大学で私の研究についてセミナーを行い、生態進化研究センターのセミナーがその後実施された。そこでは、中国全土の保護区のインベントリが作成されており、保護区における効果を測定するための包括的な手段を開発している。その作業部会のメンバーに次のセミナーを実施していただけるか聞いてみようと思う。これは APBON の他との連携にも有用であると考えている。

もう一つお伝えしたいことは、去年も出版され、おそらく今年も出版されるであろう Wildlife Trade に関する出版物についてである。Wildlife Trade は世界の人々に注目されている組織であり、また、野生生物の取引はこの地域でも頻発しており、その多くは持続不可能な取引である。作業部会で検討すべきことは、少なくとも地域のいくつかの国にお

ける地域レベルの取引を検証することであり、例えば、昨年 9 月に発表された論文では、爬虫類の 36%がこの地域で取引されていることが判明した。また、現在実施している調査では、両生類の 17%が取引されていることも分かっている。しかし、これは一部のデータに基づいており、不完全な可能性があるため、APBON のメンバーが関心を持って標準化された方法で自身の地域の市場調査等を実施し、種やその取引がどの程度持続可能あるいは持続不可能なのかという包括的な概要を把握することができれば、非常に有益だと思っている。

コメント： APBON のメンバーが具体的な行動を起こすことは素晴らしいことである。我々は多くのアイデアを有しているため、APBON のメーリングリストを活用して意見交換や協力を呼びかけたいと思う。もう一つ、IPBES への貢献についての考えはあるだろうか。

コメント： 最近 IPBES のワークショップに参加した。生態系の評価はすでに終わっていると思うが、IPBES では将来の予測のために新たなシナリオとモデル化の枠組みを作ろうとしている。それというのも、IPCC の社会生態学的シナリオは生物多様性を含んでおらず、生態系サービスを増やすことはできても開発ができない。もちろん GEOBON や APBON は主として生態系観測そのものに焦点を当てていることは理解している。

コメント： 矢原氏によれば、IPBES では現在、次の評価ラウンドのスコーピングについて議論しているとのことである。

村岡氏：

今回のような 1 日完結型のオンラインワークショップは、我々にとって初めての経験であったが、この機会に多くのことを学んだと思う。また、今後は野外研修を含むワークショップも期待されているため、状況を観察しながら、今年はどうのような会合を行うか考えていきたい。

どのようなアイデアでも歓迎する。メーリングリストを通じて連絡を取り合いたい。

記念撮影 (第2回)

